The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	条件文におけるスペース構成
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	言語文化研究. 2016, 42, p. 3-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56196
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

条件文におけるスペース構成

井　元　秀　剛

Configurations des espaces dans les phrases conditionnelles

IMOTO Hidetake

Résumé: Le présent article se propose de représenter les différentes étapes de la constitution des phrases conditionnelles au moyen des configurations spatiales définies par la théorie des espaces mentaux et, ce faisant, de mettre au clair le mécanisme de la production du sens contrefactuel. Nous verrons que le trait PAST de l'imparfait français est aussi apte à présenter le prédicat comme non réel（peu probable ou contrefactuel）alors que le même trait assigné en japonais au morphème *ta* ne l'est pas. L'imparfait qui exprime le "non réel" dans les phrases conditionnelles prend alors une interprétation soit contrefactuelle, soit peu probable, selon que, pour le locuteur, le non-P est un fait réel ou non. Le sens contrefactuel de la phrase *Si Camus avait été avec nous demain, cela aurait enrichi le débat* n'est donc qu'une des deux interprétations possibles du plus-que-parfait ainsi employé.

キーワード：メンタルスペース理論，条件文，反実

１．はじめに

本論文はメンタルスペース理論によって、フランス語および日本語の条件文に適切なスペース構成を与え、それによって条件文の数々の性質を包括的に説明できるようになることを目的としている[1]。以下、前件と後件の間に何らかの依存関係が見られる文の総称として「条件文」という名称を用い、その中でも特に非現実の事態を前件で設定し[2]、後件で前件で設定した事態のもとで成立する事態を述べる文を「仮定文」と呼ぶことにする[3]。フランス語の仮定文は典型

---

[1] Cutrer（1994）によって提案され、井元（2010）で再定義したBASE, V-POINT, EVENT, FOCUSというスペース概念を用い、その組み合わせによって時制価値を説明する理論である。それぞれのスペースの定義等については井元（2010）参照。

[2] 本稿では「非現実」を事実と異なる状況という「反実」の意味と、成立の可能性が低い「なさそうな」状況という意味の二つを表す総称的用語として用いる。

[3] 「窓を開けると、風が入ってきた」は条件文ではあるが、仮定文ではない。また仮定文の前件は想定世界の出来事ではあるが、現実世界の出来事を描写するフランス語の直説法と相容れないわけではない。（１）のようにバックシフトを起こしているとはいえ、フランス語の仮定文の前件は直説法で導入されるのが普通である。

的な非現実仮定文の場合

（1） a. S'il faisait beau, j'irais me promener dans la forêt.

b. S'il avait fait beau hier, je serais allé me promener dans la forêt.

のように、現在の事実に反する仮定、もしくは未来のなさそうな事実を想定する仮定は条件節を半過去で、帰結節を条件法現在で表し、過去の事実に反する仮定は条件節を大過去で、帰結節を条件法過去で表す。このように特に条件節において、表現されている時間に対し、表現する時称形態が一つ分過去にずれている現象はバックシフトと呼ばれている。この時後件のテンスは前件のテンスに未来要素を一つ加えた形になっている。未来要素は推量を表していると考えられるから、仮定文は前件が設定されたスペースをV-POINTとし、そこを基準にして推量を行うというのが基本構造であると考えられる。しかしながら過去の事実に反する事態を仮定しながら、過去のその時点ではなく現在の状態を推量する文も存在する。

（2） Si j'avais gagné, je serais riche.

このとき、帰結節は条件法過去ではなく条件法現在を用いる。V-POINTはどこにあるのだろうか。また、未来のことがらの仮定でありながら、大過去が用いられる場合がある。

（3） La semaine prochaine nous irons à Cerisy-la-salle participer à un colloque sur *L'Etranger*. Si Camus *avait été* avec nous, cela aurait enrichi le débat..

（曽我 2015:193）

（3）は故人であるカミュの出席が問題になっているが、故人であるから出席の可能性は事実上ゼロである。このような場合（3）のように半過去ではなく、大過去の方が適切だという。半過去を用いた場合、カミュがまだ生きていて、可能性は低いけれども万が一にでも来てくれたら、というニュアンスになる。この構造はどのようになっており、なぜそのような意味が生じるのだろうか。

一方、日本語の条件文はト、タラ、レバ、ナラという多様な形式をもち、それぞれにニュアンスも異なっている。

（4） a. あの時、雨が降ったら散歩はやめていた。

b. あの時、雨が降っていたら散歩はやめていた。

c. あの時、雨が降れば散歩はやめていた。

しかしこのように並べてみると、いずれも過去の事実に反する事態を仮定し、その仮定のもとで生じていたであろう事態を述べている文であって、英仏語に見られるようなバックシフトの現象は観察されない。(4a) と (4b) にはタとテイタの対立が見られるが、その違いは「雨が降る」という事態をとらえるアスペクトの違いであって、蓋然性の多寡とは関係がない。

しかしながら日本語でも英仏語と同様に、ル形／タ形の対立、さらにル形／テイル形の対立が、テンスやアスペクトの対立ではなく、反実姓にまつわるモーダルな対立を表すために使われることもあるという指摘を工藤（1997）がしている。

（5）a.（3か月で死んだ）あの子が生きていたなら、今頃は大学生になっていただろう。

b.（行方不明の）あの子が生きているなら、今頃は大学生になっているだろう。

（工藤 1997:51）

（6）a. すぐ病院に運んでいたなら、助かっていただろう。

b. すぐ病院に運んだ（の）なら、助かっただろう。（工藤 1997:52）

（5）のル形とタ形の対立は、タ形を用いた（5a）は反実、ル形を用いた（5b）は事実未定であり、（6）のテイタ形とタ形の対立はテイタ形を用いた（6a）は反実、タ形を用いた（6b）は事実未定で、そのような区別のために用いられているという。実際のところ日本語において、過去性や完了性と仮定性はどのような関係にあるのだろうか。日本語とフランス語のそれぞれのスペース構成を示すことで、そのような問題にも答え、それぞれの言語の条件文の構造の違いを明らかにすることが本稿の目的である。

2．フランス語の仮定文の構造

2.1．基本構造

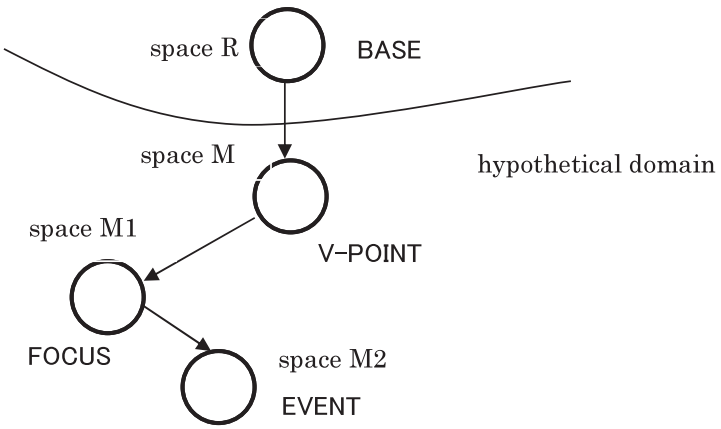
井元（2010）においてCutrer（1994）が英語の

（7） If she had had time yesterday, she would have called.

（Cutrer 1994:312）

について与えた図を修正し、以下のような図式を提案した[4]。

（8）



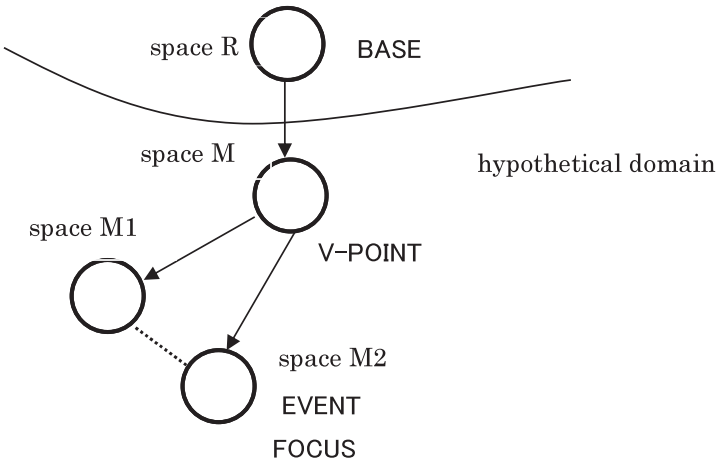
[4] （8）は井元（2010）以降に採用した作図の方式に基づいて書き直してある。縦軸はスペースが作られる順番に対応し、下に書かれたスペースは上に書かれたスペースの後に作られる。横方向は時間の前後関係を表し、右側にあるスペースはそれより左側に書かれたスペースより後の時間にあることを示す。矢印はどのスペースからみた時間関係であるかを示し、左向きだと過去方向、右向きだと未来方向、真下もしくは真上の場合は同時であることを表す。（7）の分析では、最初に与えられたスペースをRとし、その後作られたスペースをできた順にM, M1, M 2 と名付けておく。

これは後件時のスペース構成だが、前件から順番にたどると以下のようになる。前件の過去完了形が持っているテンス素性はPAST+PASTであるが、テンス素性としてのPASTは時間的な過去スペースを指定する働きの他に、時間的には同時だが，非現実の事態を構築する仮定スペースを指定する働きがある。最初のPASTによって新しいスペースMが作られるが、これが非現実世界に事態を位置づけるPASTで、所与のスペースRと同じ時間枠であるが非現実の領域の中に設定する。次に前件の2番目のPASTが今度は過去のマーカーとして機能し、Mから過去方向に新しいスペースM1が作られ、そこにEVENTとFOCUSが移る[5]。そして後件になって、そこから未来方向に新しいスペースM2が作られ、そこにEVENTが移動する、という図式である。これによって後件の持っているテンス素性であるPAST+PAST+FUTUREとスペース構成がうまく対応することになる。

フランス語も基本的に同じであると考えられるが、（8）の図式だとMとM2の間の時間関係は示されないが、（7）の後件はあくまでも過去の状態の推量であって、時間的にM2がMと同時かMより後という解釈は許されない。実際（2）のようにMとM2が同時であれば、フランス語の場合、後件で用いられる時制は条件法現在であって条件法過去ではないのである。さらに、言語直観からしても、後件は主文であるので、M2は単なるEVENTではなくFOCUSもここにあると考えなくてはならないと思われる。

以上の理由から今回（8）を以下のように修正したい。

（9）



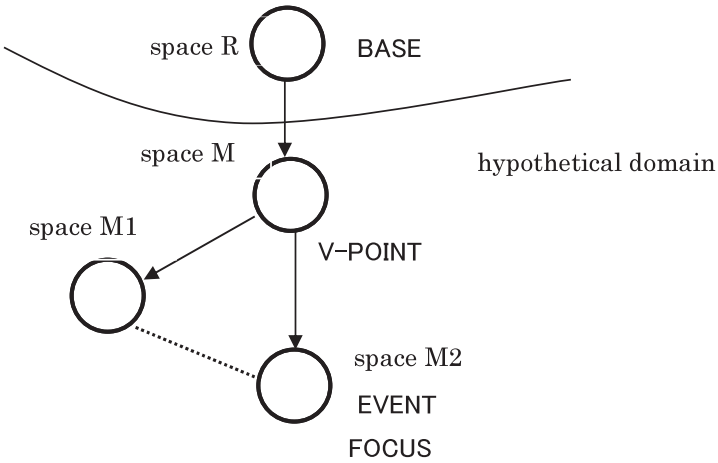
即ち、前件の後、M1からM2に向けてテンス素性が与えられるのではなく、Mから新たなスペースM2が作られ、MからPAST+PREDICTIONによって指定されるのである。PREDICTIONの素性は意味によって与えられるもので、その動機付けとして前件と後件の対応関係を読み取

[5] PASTの意味の二つの現れは後に（24ab）の形で定式化する。最初のPASTは（24b）、2番目のPASTは（24a）の意味として実現したことになる。

ることができ、その部分を図では破線で示した。ただし、これはアクセスパスとは直接の関係はない。BASEであるRからのアクセスパスはR→M→M2であり、would have calledが与えるPAST+PAST+PREDICTIONによってアクセスされるのである。2番目のPASTはMからM2が過去方向にあることを示している。

このような形でとらえると、（2）のような前件と後件の組み合わせも全く同じように処理できる。（2）は以下のように図示できる。

（10）



（9）と（10）の違いは、MとM2との位置関係の違いにすぎない。（9）ではMからM2にPAST+PREDICTIONでアクセスされるのに対し、（10）ではPRESENT+PREDICTIONでアクセスされるのである[6]。

２.２．仮定領域

ここで、PASTによって開かれる仮定領域（hypothetical domain）について述べておきたい。テンス素性としてのPASTは現実世界における過去スペースを指定する働きの他に、時間的には同時だが、非現実の事態を構築する仮定スペースを指定する働きがある。（9）（10）におけるスペースMがそれで、このスペースが作られるとV-POINTがここに移動し、仮定領域においてBASEのようなふるまいをする。そこで井元（2010）では特にこのスペースを基本仮定スペース（HB : hypothetical base space）と名付けた。HBが構築された後HBから作られるスペースによって構築される領域が仮定領域である。

非現実の事態を想定し、その想定のもとで生じる出来事を述べる文を非現実仮定文と呼ぶことにすれば、非現実仮定文について次のことが言える。

（11）　非現実仮定文におけるV-POINTは基本仮定スペース（HB）になくてはならない。

[6] PRESENTの規定は（47）で、時間的には「非過去」を表し、現在と未来は区別されない。

（11）の規定によって、なぜフランス語では非現実仮定を導入するのが半過去に限られるのかということが説明できる。PASTで指定されたスペースにV-POINTを置くことができるのはフランス語では半過去に限られるからである。

バックシフト現象の一部もPASTが仮定領域を構築するということで説明できるが、未来のことがらに対する前件を現在形で表現する仮定文は仮定領域とは無関係である。

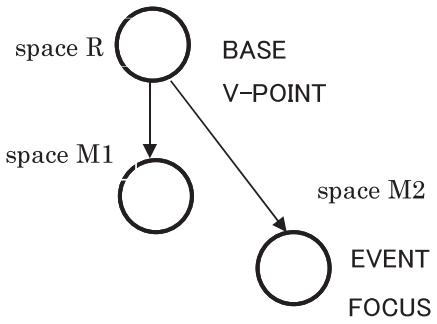
（12） S'il fait beau demain, j'irai me promener dans la forêt.

（12）がそれだが、si節の現在形はLe Goffic & Lab（2001）がprésent‘pro futuro’と呼ぶ通常の現在形の用法である。

（13） Dans cinq minutes, ça explose ! （Le Goffic & Lab 2001:81）

がそうであるが、典型的には予定を表す文など、未来のことがらであっても、factの属性を帯びて確定的に述べる時に用いられる。仮定とはそもそもそのような事態を想定することであって、推量（prediction）の入りこむ余地がないのだから、未来のことがらであっても、まさにこの現在形を条件節に用いなければならない環境なのである。（12）を図示すれば以下のようになる。

（14）



図でRとM1は時間的に同じ位置に置かれているが、現在から明日までを含んだ全体がRやM1としてとらえられているからこれでよいのである。前件から後件に移るときにFOCUSとEVENTがM1からM2に移動する。仮定領域で基本仮定スペースMが果たしていた役割をここでは本来のBASEであるRがになうことになる。

話し手の側からすれば、前件で想定する事態は、現在スペースの中で実現の可能性のある事態であるが、それが成立するか否かを自分は知らない状態である、その意味で（12）と次の文は全く同じ認識のありようを示している。

（15） Si Paul aime le bon vin, il en boira.

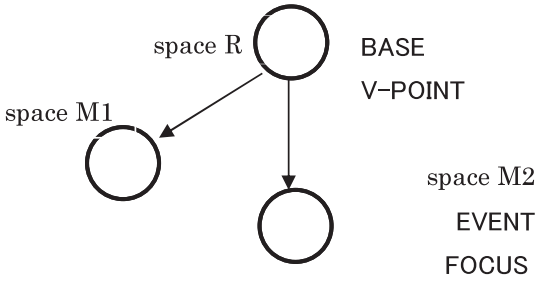
この場合もポールがうまいワインを好きかどうか話し手は単に知らないだけで、そのような事態は現在スペース内で成立が可能な事態として描いているのである。後件はそのような事態のもとでBASEから推量を行っているので、この仮定文を図示すれば（12）と全く同じ（14）となる。

前件において、内容が事実であるかどうか知らないというだけで、非現実の事態として描く意図のない仮定は認識論的仮定とも呼ばれるが、それはこのようにBASEを中心になされる仮定であって基本仮定スペースを介在しないからバックシフトは行われない。過去の事実の仮定と帰結は（14）におけるM1とM2が単に過去方向に設定されるだけである。

（16） Si Paul a tapé la thèse de Marie, il l'aime.

（16）は、前件の内容について人から聞いただけだから現実かどうか保証はできないが、話し手自身も現実だと思っているために、現実世界にM1を設定する。これを図示すれば以下のようになる。

（17）



前件も後件もBASEからアクセスされているのであり、設定される時間が異なるだけで、基本的な構造は（14）と同じである。これもバックシフトとは無縁である。

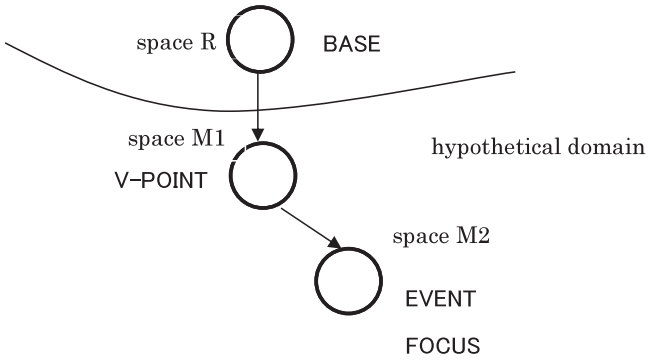
２.３．仮定と蓋然性

未来に設定される事態に対して基本仮定スペースが介在し、真にバックシフトが行われるのは以下のような文の場合である。

（18） S'il faisait beau demain, j'irais me promener dans la forêt.

この時のスペース構成は以下のようになる。

（19）



前件は半過去がもつPASTの素性によって基本仮定スペースM1が設定され、そこにV-POINT, EVENT, FOCUSが移動する。後件の段階になって、Rからではなく、このM1からEVENTとFOCUSがM2に移動するのである。（14）と（19）を比較すれば、その違いは（14）では後件がBASEから派生しているのに対し、（19）では基本仮定スペースから派生している。この派生元の違いが、認識論的条件文と非現実仮定文の本質的な構造上の違いである。一方、前件のM1のRからの相対的位置は（14）と（19）で変わりがないが、（19）では仮定領域の中に設定されている。このM1の領域の違いが、（12）と（18）の意味の違いである。（12）では「雨が降る」という事態をありそうなことがらとして描いているのに対し、（18）ではなさそうな事態として描いている。これは蓋然性の問題である。とすると、PASTの素性がうむ仮定領域内のスペースの設定は「なさそうな事態」という蓋然性の低さという意味になって実現するのだろうか。

（20） Si j'étais toi, j'irais faire mes études en France.

（20）では「なさそうな事態」ではなく「反実の事態」が表現されている。ということはフランス語では蓋然性の低い「なそさうな事態」と蓋然性がゼロの「反実の事態」とは区別されないのだろうか。（３）では、まさにその「なさそう」と「反実」がはっきり区別されている。曽我（2015）は、<si P, Q>となる構文全体について、前件の事態Pが表している状況を、アスペクトの面で「完了イメージ・非完了イメージ」のどちらであるかによって２つに大別し、それぞれについて、モダリティの面で「ありそう・なさそう・反実」の３つを、時期の面で「過去・現在・未来」の３つを区別する。そしてそれらの状況の組み合わせごとに、最も適切となる時制を探っていくという方策をとっている。時制表現の選択にあたって、アスペクト、ムード、テンスの三つが相互に関連し、複雑な構造をなしていることは言うまでもないが、筆者としては意味から記号という方向ではなく、記号の側にたって、そもそもその記号が表している意味的な本質は何かというように、記号の方から意味を探るという方向で考えてみたい。半過去や大過去が表しているのはそもそも何なのか。その本質的な意味がなぜアスペクト、ムード、テンスの複雑に絡み合った実体を表現できるのか、である。半過去に関しては、ここでとりあげた「なさそう」「反実」の他に「現実の過去」という意味もある。これらの意味は相互に排他的であるから、３つの意味を多義的に有しているのであろうか。

２.３.１. 半過去・大過去の本質的意味

筆者の考える半過去の本質的機能は以下の通りである。

（21） BASEからPASTの関係で結ばれるスペースMにV-POINT, EVENT, FOCUSを移動させる。

さらに「助動詞＋過去分詞」によって示される複合形の本質的機能は

（22） EVENTをV-POINTもしくはFOCUSの位置からPASTの関係を持つように設定する。

である。大過去は半過去の複合形であるから、（21）（22）より、その機能は

（23）　3つのスペースR, M, M1についてRからM、MからM1がPASTの関係で結ばれ、RにBASE、MにV-POINT、M1にEVENT、さらにMもしくはM1にFOCUSが置かれるようなスペースを構築する。

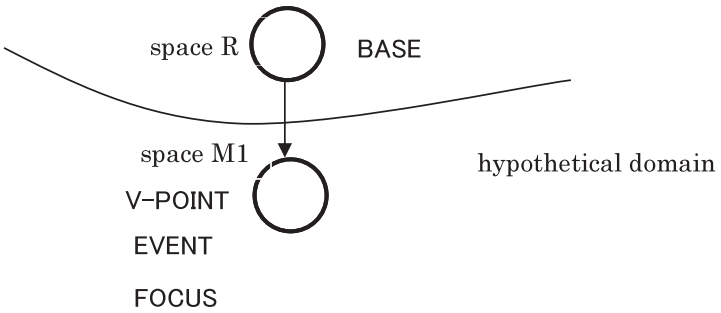
となる。さらにテンス素性PASTは方向性を持った二つのスペース間の関係で、スペースAからスペースBがPASTの関係で指定されるとき、次の二つの意味のうち、どちらか一つだけが実現する。

（24）　a.　AはBより時間的に前（過去）にある。

b.　AとBは時間的に同じだが、Bは仮定領域の中にある。

である。（24b）の意味は（24a）に動機づけられた拡張的な意味であるが、この二つは時間関係において相互に排他的であり、その意味で二義的である。本稿で扱う仮定文の半過去の機能は（24b）に限られ、これと（21）をあわせると、非現実の半過去は以下のように図示することができる。

（25）



半過去が仮定文内で表している意味はこれ以上でもこれ以下でもない。ではなぜ半過去が（18）のような時間的な未来を表せるのだろうか。これは仮定領域の中の時間区分が過去と非過去しかないからであって、未来も現在も非過去という意味で（24b）で記述する「時間的に同じ」中に含まれるからである。非現実の世界では現在と未来のことがらはどちらも「まだ起こっていないこと」であり、区別する必要性は低く、異なった時称形態を用いて表現仕分けることはないのである。図示される内容も（25）のままでよく、同時が未来も含むという意味でM1を右側にずらす必要もない。

では「反実」と「なさそう」というモーダルな意味の多義性はどうなるのだろうか。これも筆者は一つの意味の二つの現れというように理解している。仮定領域内の事行が帯びる価値は

（26）　事行が非現実のものとして描かれる。

という唯一の価値でしかない。現実と異なる事態として描くということである。これが時に反実になり、時になさそうになるのは、言語外世界のありようが非現実の意味の上に加わるから

である。すなわち、言語外世界にあって事実が確定した現在や過去の事柄を非現実のものとして描き出せば、それは必然的に反実になるが、未来のことがらは確定していないので、非現実のことがらとして描いていても実現する可能性をゼロにすることはできない。従って、未来のことを非現実の事態として描いても、なさそうな事態にしか実際はならないのである。結局「なさそう」の意味は半過去本来のもつ本質的な意味ではなく、本質的意味が未来という文脈の中で発現した副次的な意味効果ということになる。ここで改めて（1 a）と（18）を再掲する。

（27） a. S'il faisait beau, j'irais me promener dans la forêt. （=（1 a））

b. S'il faisait beau *demain*, j'irais me promener dans la forêt.（=（18））

こうして並べてみると、（27a）と（27b）は全く同じ内容で、（27b）の方にdemainという副詞が付加されているだけ、であることがわかる。筆者は（27a）の前件をmaintenantが省略された形で、その意味で（27b）と意味的に対立しているものとは考えない。（27b）はあくまで（27a）の意味の上に、demainという限定が加わっただけだとみるのである。つまり（27b）が表している意味は、（27a）が表している意味の真部分集合であって、（27b）が真となるあらゆる状況において（27a）は真となる。別な言い方をすると、（27b）の意味の中に、（27a）の意味がすべて含まれているということである。曽我（2015）の分類によれば、半過去はアスペクト面で「非完了イメージ」を、テンスでは「現在・未来」の二つを、モダリティーの面では「反実・なさそう」の二つを表すことになる。このうちアスペクトの非完了は半過去本来が持っているアスペクト的性質であり、完了イメージを表す大過去と明確な対立関係にある。これに対し、「現在・未来」は非過去ということで仮定領域の中では区別されることのない同一の時間枠の中にあることがらなのである。「現在・未来」の区別は副詞など、あくまで文脈から規定される補足的な限定にすぎない。モダリティーの二つの区別もこれと全く同じで、半過去自体は単に事態を非現実のものとして描いているだけなのであるが、話し手の現実というメンタルスペースの中に、対応する現実の事態が登録されていれば「反実」、登録されていなければ「なさそう」になるだけなのである。別な言い方をすれば、si PでPを半過去で述べる時、話し手はPを非現実のものとして描いている。この時～Pが現実であることを知っていればPは「反実」の事態であり、～Pが現実であることを知らなければPは「なさそうな」事態であるということである。話し手のメンタルスペースのありよう、すなわち、話し手が～Pを現実と認識しているか否か、は文脈や言語外世界のありようが決めるのであって、Pの時称形態が表す意味とは直接の関係はない[7]。未来のことがらは、通常「なさそう」であって、「反実」という解釈がうまれにくいのは、未来のことは未だ確定しておらず～Pは通常現実ではないからである[8]。半過去はこのように一見すると多様な意味を描いているように思えるが、非現実仮定文における本質的価値は一つだ

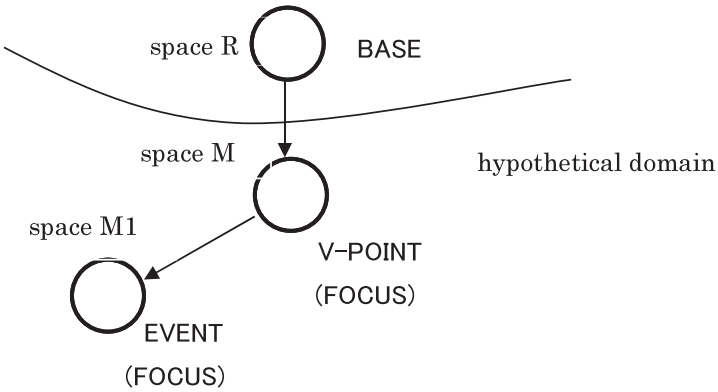
[7] 話し手の現実というメンタルスペースは前件Pや後件Qが構築するスペースとは無関係であり、ここで図示しているスペースとは無関係である。

[8] （3）のように、未来のことがらであっても現実にありえないことがはっきりしていれば、「反実」という解釈も成立する。その場合、～Pが話者の現実スペース内に登録されているのである。

けである。

では大過去はどうなるのだろうか。大過去は（23）で規定したようにBASEからPAST+PASTでEVENTが指定される形式だが、半過去によって与えられる最初のPASTを、ここでは（24b）の意味に限定する。2番目のPASTは（24）の両方の可能性を持っているが、より一般的な（24a）が実現したケースをまず図示すると、（9）の前件部分は、以下のようになる。

（28）



ここでFOCUSの位置は文脈によってMにある場合もM1にある場合もある。これは大過去が持つ本質的な多義性であり、通常の時制用法の中にも見られるものである。（28）でMの時間的位置は前述したように現在と未来で区別されない。それに対応して大過去による完了イメージの場合も現在の完了と未来の完了は区別されない。どちらの場合も図示すれば前件は（28）であり、完了イメージであるからFOCUSはMの方にある。曽我（2015）は現在の完了イメージとして

（29） Si elle avait réalisé son projet, elle n'en serait pas plus heureuse. （曽我 2015:183）

を、未来の完了イメージとして

（30） Je viens d'apprendre que notre décorateur a eu un accident de voiture. S'il avait fini demain, nous aurions pu emménager après-demain. （曽我 2015:184）

を例としてあげている。過去の例は挙げられていないが、過去を表す場合、（28）の図ではM1の方にFOCUSが来ることになる。この場合は（31）のようにテリックな動詞で完了状態を表す場合であっても、非完了の過去と同じ図式になり、動作の全体を完成相として把握するような形になると思われる。

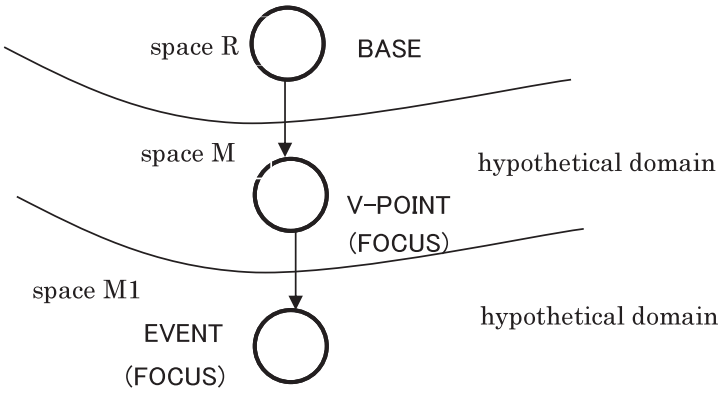
（31） Si elle avait réalisé son projet, elle n'en aurait pas été plus heureuse.

非完了イメージを表す場合は、（28）の図式のもとではM1にFOCUSがある場合に限られる。これは過去の状態を否定する場合で、（1b）がその典型例である。

２.３.２. 大過去の特殊用法

曽我（2015）が紹介している（３）は、上記の図式に全くあてはまらない大過去の用法である。これはPAST+PASTで表される大過去の素性の２番目のPASTが（24b）の意味で実現したケースであると思われる。図示すると以下のようになる。

（32）



二重に仮定領域に押しやっているわけで、非現実を二重に作り上げて「反実」の事態を無理矢理構築しているのである。（３）のように、故人が対象だから現在、もしくは未来の事柄であっても絶対に成立しないという確信があるために、はっきりと反実を明示するために用いる。半過去だと生じてしまう「未実現の事柄なのだから実現の可能性がゼロではない」という含意を完全に打ち消すための有標の言語操作である。

この用法を（32）のように表示することで、いくつかのことが説明できる。まず、この用法は現在の事柄であっても未来の事柄であってもよい、ということがある。（32）のようにMとM1は常にRと同じ位置にある。仮定領域の中では現在と未来は区別されず、同じ時間枠の中にあるということは既に述べた。ここでもそれが適用されるのである。（３）は未来の例だが、現在のことであってもよい。

（33） Dans la salle d'à côté ils sont en pleine discussion sur *L'Etranger*. Si Camus（?）était / avait été avec eux, cela（?）enrichirait / aurait enrichi le débat. （曽我 2015:200）

現在進行中のことがらを問題にしているのであれば、言語外現実との照合から（33）の内容はそもそも反実でしかあり得ない。（33）だとカミュが故人であり、実際にはその可能性が全くないというニュアンスが伝わることになる。

さらに（32）は、なぜこの用法が非完了の事態に限られるのか、という理由も説明する。（24）に示したPASTの二つの意味は相互に排他的であって、（24a）が実現するときには（24b）は実現せず、逆に（24b）が実現するときには（24a）は実現しない。完了の事態を表現するためには大過去の２番目のPASTは（24a）として実現しなくてはならず、必然的に（32）ではなく、

（28）の形にならざるを得なくなるからである。

最後にこの大過去の反実用法は大過去の通常の用法からみると周辺的であり、特殊なものである、と考える根拠について述べておきたい。まず、PASTの（24b）の意味は（24a）が必然的にもつモーダルな属性に動機づけられて派生した意味であるが、極めて特殊な環境でしか発現しない。フランス語では半過去以外に単純過去、複合過去などあらゆる過去形がこの意義素を備えているが、そのうち（24b）になりえるのは半過去のみである。（11）で規定したように、これは基本仮定スペースにV-POINTがおかれなくては仮定文が成立しないからである。一方あらゆる複合形も（22）で規定したようにPASTをそなえているが、（24b）になりえるのは大過去の、しかも、この仮定文内におかれたものに限られている。そして大過去の場合は半過去ほど一般的でないから、この大過去の複合形からくるPASTの（24b）は半過去の（24b）からの類推による拡張にすぎないのではないか、という理由が第一である。

次に、そもそも「なさそう」の意味は「非現実」の意味の一つの現れにすぎず、一種の含意であって本質的な機能とは直接の関わりはない。だとすると、この大過去の操作によって生じる「反実」の意味も、一種の強調操作にかかわる主観的な内容であって真理条件には関与しない含意と考えた方がよいのではないかというのが第二の理由である。

（34） a. Si Camus *était* avec nous, cela enrichirait le débat.

b. Si Camus *avait été* avec nous, cela aurait enrichit le débat.

（34b）は、真理条件的には一度で十分な（24b）の操作をあえて二度繰り返して強調したものであって、

（35） a. Sa maison est *très* grande.

b. Sa maison est *très très très* grande !

との区別に通じるものがあるように思う。このような場合、インフォーマントの反応には注意を要する。（35）は真理条件にかかわる違いはないが、主観的な態度が異なっている。（35b）をインフォーマントに示してtrès très を省略できるか、と問うたところで、結局のところ省略できるが意味が異なる、と答える以外ないだろう。それでもあえて、（35b）のもつ驚嘆の意味効果を保ったまま省略できるか、と問われれば答えは「否」にならざるを得ない。（27b）は（27a）の意味に限定が加わったものにすぎないからといって、demainを省略できるか、と問われたときの「否」と同じである。

曽我（2015）によると未来の「反実」には大過去を用いなくてはならず、半過去は用いにくいという。

（36） La violoniste du deuxième étage a été engagée dans un orchestre à New York et ne sera de retour que dans deux ans. C'est dommage pour nous. Si elle *avait habité* ici l'année prochaine, je lui aurais demandé d'apprendre le violon à mon fils. （曽我 2015:193）

（36）のavait habitéをhabitaitに換えられないというのがインフォーマントの判断である。だが、

（37） Si elle *habitait* ici l'année prochaine, je lui demanderais d'apprendre le violon à mon fils.

という仮定文そのものを非文とするインフォーマントはいない。（37）は「なさそう」であって「反実」ではない、と反論されそうだが、「反実」も「なさそう」もあくまで含意にすぎない。実際（36）のような状況であっても、現実にはニューヨークのオケを途中でやめて帰ってくるというような可能性は排除できず、外的な状況としては来年息子にヴァイオリンを教えてもらう可能性はゼロではないはずである。可能性がないと思っている場合に通常我々は半過去を用いて表現するのであって、「少しはある」などの可能性は意識の外にある。つまり、通常は実現しないと考えているだけで十分であって、その逆の可能性の有無は問題にならないし、言語記号の上でも区別されない。（36）は通常は問題にならないその区別をあえて意識の上にのぼらせ、オーケストラへの雇用をもって「来年ここに住んでいない」という事態を現実として登録していることを示し、そのことを残念に思うという判断まで追加して提示している。そのような形で前面に押し出された、主観的な「反実」という含意を表現するためには大過去でなくてはならない、というのが（36）の判定の内実であろうと思われる。明日どこかに行かないかと提案されながら断るとき、Si j'avais le temps, J'irais volontiers. と答えるのは自然である。話し手は始めから行くつもりなど全くなく、メンタルスペースの中でも未来のことではあるが～ P（je n'ai pas le temps）は登録済みである。しかしそのことを前面に押し出す意図がないので、わざわざ大過去にはしない。実際筆者が尋ねたインフォーマントは（３）のように反実が明らかな事例でも、半過去を用いて構わないと答えた。「故人」ということを強調する意図がなければ、通常反実としか考えられない事柄であっても半過去は用いられ得ると筆者は考える。逆に故人であることを意識して「反実」という含意を積極的にうちだそうとするなら大過去を用いるしかない。

大過去の反実が含意でしかない、ということは文脈上反実であることがはっきりしている状況で用いる大過去の場合によりはっきりしてくる。

（38）（近くにいる女性の振る舞いを見ながら）

a. Si elle *était* ma fille, je ne la laisserais pas agir comme ça.

b. Si elle *avait été* ma fille, je ne l'aurais pas laissée agir comme ça.

（曽我 2015:203, 207）

（38）は現在の確認できる事実に反する仮定で、文脈上「反実」であることが明らかである。現在の事柄に関する反実は、曽我の図式では半過去も大過去も用いることができるから、もし大過去が「反実」性を表すため、のものだとすると（38）は全く同じ意味を表すことになる。ところが、実際は特別なニュアンスを与えることなく反実を表現するのは（38a）の方であって、（38b）は特殊な語用論的条件のもとでしか用いられない。曽我があげるのは、例えば、聞き手が問題となっている少女の父親か母親であって、「彼女が私の娘である」という反実状況を現実からことさら遠いものとして描き、聞き手に対する教育の批判ととられかねないような状況

を回避しようとする意図がある場合である。逆に言えば、この大過去は反実のためではなく、そのような主観的な含意のために用いられたのであって、反実そのものは大過去の意味と直接関わってはいないのである。

大過去が特殊な含意を得るための特別の操作なのだ、という第三の理由として、この用法は必ず文脈的支えがなくてはならないということもある。大過去が反実として用いられるためには、大過去を用いなくても反実とわかるような文脈があらかじめ存在していなくてはならない。（３）や（33）ではカミュが故人であることを知らない人物に向かって発言することは考えられないし、（36）はsiで始まる前の２文で、反実であることの理由を明示し、さらにそれを主観的になげく、という文脈を作っているから大過去で反実性を強調できるのである。

（39） a. Si elle *était* disponible demain, j'irais au concert avec elle.

b. Si elle *avait été* disponible demain, je serais allé au concert avec elle.

（39a）は文脈の支えがなくとも、「彼女は明日あいていないだろう」と話し手が判断している通常の非現実仮定文として理解してもらえるだろうが、（39b）は文脈から反実であることが了解できなければ、文として奇異な印象を与えるだろうと思われる。

曽我（2015）は「現在・未来の非完了P状況と半過去・大過去の使い分け」に関して以下のように述べている。

（40） 現在・未来の非完了P状況を「反実」として仮定するとき、話し手は <si P> に原則として大過去を用いる。ただし、～Pが聞き手にとって現実ととらえやすいと判断する場合は半過去を用いることがある。 （曽我 2015:204）

上述したように、筆者の結論はこれとは異なる。もし（40）が正しいのであれば、（38）もデフォルトは（38b）の方であって、（38a）は～Pが聞き手にとって現実ととらえやすいと判断しているために代用することも可能な表現ということになる。しかし、実際は（38a）の方が中立的な表現であり、（38b）は特殊な語用論的環境を必要とし、プラスアルファの含意を生んでいる。曽我と筆者の大きな違いは「反実」を言語記号が直接表現すべき本質的な意味なのか、単なる含意にすぎないと考えるかにある。（40）を修正するような形で筆者としての結論を述べるなら以下のようになるだろう。

（41） 時間にかかわりなく、非完了P状況を「非現実」として仮定するとき、話し手は<si P>に原則として半過去を用いる。ただし、「非現実性」を強調し、特別な含意をもたせたいという意図が発話者にある場合は大過去を用いることがある。未来における「反実」の意味も、そのような含意の１つにすぎない。

３．日本語の仮定文

日本語の場合、ト、タラ、レバ、ナラという異なった形式があり、テンスの面でル形とタ形、

アスペクトの面で完成相（ル形、タ形）と継続相（テイル形、テイタ形）という対立があり、これらが複雑にからみあって微妙な意味の違いを構成している。（５）（６）の例は確かに反実と真偽未定の対立を示しているように見えるが、日本語もフランス語や英語同様にPASTが（24b）の意味で実現することがあるのだろうか。

３.１．ナラ条件文

工藤（1997）があげた（５）（６）の例はいずれも、ナラ条件文の例であり、これをフランス語の非現実仮定文と比較するのは危険である。ナラ条件文のナラは断定の助動詞「なり」の未然形からきたもので、「運んだのなら」と連体助詞「の」を挿入できることからもわかるように、命題内容そのものを仮定するのではなく、一旦命題全体を体言化して、その命題を断言（「なり」）できるか否かを仮定しているのてある。

（42）a. 明日晴れれば、森に行きます。

b. 明日晴れたら、森に行きます。

c. 明日晴れるなら、森に行きます。

よりシンプルな形で例示すると、（42a）と（42b）は「晴れる」というイベントを単なる状態として提示するか、確認ずみの結果状態として提示するかの違いはあるが、基本的に「晴れること」を仮定していて、２つの意味に大きな違いはない。これに対し、（42c）は晴れるかどうかではなく、明日晴れると「断定できること」を仮定しているのである。従って、たとえば，天気予報や知人から明日晴れると聞かされて，「そう断定できるのなら，これから森に行くつもりだ」という意思表明の発話になりうる。そして今日のうちから森に行ってもよい。しかし、（42ab）は明日晴れることを仮定しているのであるから、その真偽は明日にならないと確定しない。つまり明日にならなければ行くか行かないかは決まらないのである[9]。

（43） a. 君と会うのがこれで最後なら、このワインを開けよう。

b. 君と会うのがこれで最後だったら、このワインを開けよう。

（43a）は例えば相手がこれで最後だと言っていたりして、そのような断言ができるということならこの断定を真とし、後件で示された意志を有効にすることができるので問題ない。これに対し（43b）では、「最後であること」を仮定している。これが真であるかどうかはその後実際にあうことがなかったという状態を確認してからでなければ確定しないことがらなのである。前件の真を確定できないのだから、後件の意志を有効にすることができず文として奇異な感じをうけるのである。

（44）a. ３時に出発したら、６時には着くだろう。

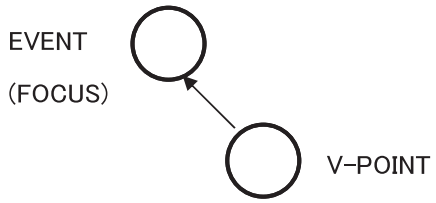
b. ３時に出発したなら、６時には着くだろう。

[9] 名詞述語文の場合も基本的には同じで、「明日晴れだったら」は（42ab）に、「明日晴れなら」は（42c）に対応するが、「明日晴れだったら」は天気予報の結果が「明日晴れだったら」という意味にも解釈可能なので動詞文ほどはっきりした違いはでない。

（44a）は「3時に出発すること」を仮定しているので、今が2時で未来の仮定であっても問題ない。これに対し、（44b）は「3時に出発したと断定できること」を仮定しているので、通常発話時は3時以降でなくてはならない[10]。

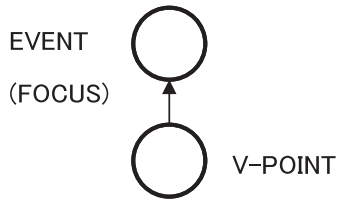
（44ab）を図示しわけることで、タラ条件文とナラ条件文の構造の違いを示すことかができると思う。日本語の場合テンス素性として存在するのはPASTと非過去の関係を表すPRESENTの二つだけである。井元（2010）で主張した日本語の特徴は、日本語のテンス形態素はBASEとの位置関係を示さず、はじめに与えられているのはEVENTであって、EVENTからV-POINTの位置を指定するという形になっているということである。PASTはV-POINTからEVENTに後から指定する形となり

（45）



と描け、PRESENTはこの関係が同時なので

（46）



となる[11]。なおV-POINTからEVENTがPRESENTの関係で指定されるというのは

（47）EVENTがV-POINTよりも前（過去）にはない

ということであり、フランス語の仮定文内のPASTと同様、同時か未来かは区別されない。日本語では通常（45）はタ形、（46）はル形で示される。条件文の場合、タラはタ形を内部に含んでいるので（45）を、レバ、ナラは（46）の関係を内包していると考えられる[12]。

---

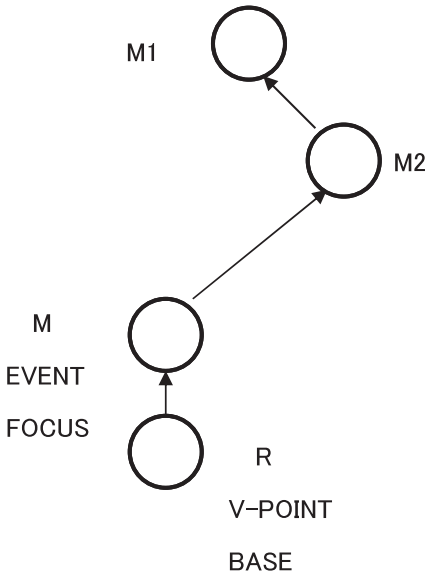
[10] これは「pしたならq」という条件文でpが常にBASEより前の事態であるということではない。「ジョニーが来たなら伝えてよ、2時間待ってたと」（阿久悠『ジョニーへの伝言』）などのように、「ジョニーが来た」と断定できる状況になったなら伝えてほしいということなので問題ない。（44b）では「3時に出発した」という断言の内容を他者の言説の引用と解釈するために、BASEからみて過去の事態という解釈が生まれている。

[11] 通常FOCUSはEVENTの位置に置かれることが多いので、括弧付きで付して置くが、PASTとPRESENTの指標は日本語ではV-POINTとEVENTの位置しか指定しない。

[12] レバは「動詞の仮定形活用語尾＋係助詞」からなっており、未定条件を表すからPRESENTとみなしうるが、元々は已然形の形であり、PASTの素性を有していた。現在でも「問えば答える」のように、その名残が一部に残っているが、一般にはPRESENTとみなして差し支えないと思う。また、トは同一スペース内に前件と後件のイベントを列挙する形式なのでここでは扱わない。井元（2013）参照

（44a）の前件は（45）でFOCUSがEVENTに置かれた形である。後件の「着くだろう」は「着いただろう」と対立の関係にあり、「着く」という述定部分と、「だろう」という推測断定の部分を分割してとらえることも可能で、それをふまえて後件部分を付加するなら、以下のように図示できる。「着く」はル形で、PRESENTのテンス素性をもつから、その部分は（46）のように書かれなくてはならないが、未来の解釈に限定し、便宜的にEVENTを未来の位置にもってくるように右側に描いておく。

（48）

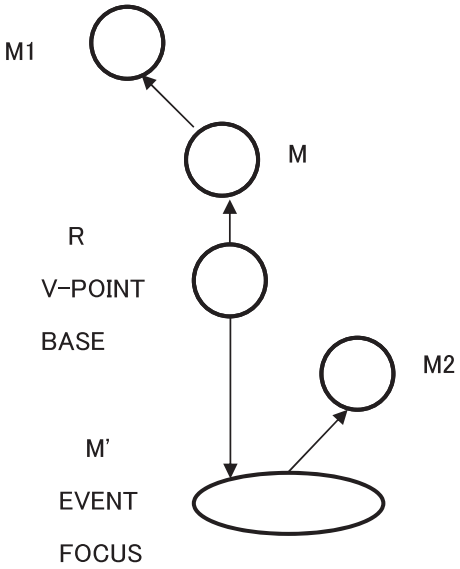


M1に前件「3時に出発する」というイベントが登録され、タラで指定されるので、V-POINTがM2に移動し、今度はそこにEVENTが移動して後件のイベント「6時には着く」が登録される。これはル形なので便宜上左の位置に描かれたスペースMにV-POINTが移動できる。そこに次のイベントである「だろう」という断定の推測が登録され、これは現在形なので同じ時間的位置に次のV-POINTのRが設定され、ここが最後のV-POINTなのでBASEと認定される[13]。この図によってM1がMやRから見て未来であっても構わないことが理解できるだろう。

一方、（44b）は前件部分で「出発したなら」は「出発するなら」と対立するから、ここも「出発した」という述定のスペースと、「なら」という断定のスペースを分割することができる。前件部分は（45）に（46）をつけたしたような形になるが、後件部分まで付加すると以下のようになる。

[13] 最後のV-POINTがBASEである、というのは日本語に特徴的な談話構成原理の一つである。

（49）



M1に前件のイベント「3時に出る」が登録されるが、タラによってV-POINTがMに移り、ここで次のイベント「なら」の断定がなされる。この断定によりV-POINTはRに移る[14]。EVENTはこのV-POINTの位置に移ることも可能だが、ここでは移らず、全く新たなるスペースM2が作られ、そこにEVENTが移り、後件の「6時には着く」が登録される[15]。「着く」のル形のPRESENTはV-POINTをM’に指定する。このM’に推測断定のイベント「だろう」が登録されるが、「だろう」のPRESENTによって指定される最後のV-POINTの位置が以前のV-POINTの位置であったRと重なり、ここがBASEとなるのである。（49）によって、M1がRより過去になくてはならないことも理解できるだろう。またこの場合、前件はMで、後件はM’にあたる。前件はM1そのものではなく、M1と断定すること（M）であり、後件はM2そのものではなくM2と推量すること（M’）なのである。（48）と（49）の大きな違いは（48）では前件M1と後件M2が直接M2におかれたV-POINTを介して結びついているのに対し、（49）ではBASEを介して前件Mと後件M’が結びついていることである。この構造は（17）と同じであり、実際（16）を翻訳しようとすれば、必然的にナラ条件文になる。

（50）もしポールがマリーの博論をタイプしたのなら、彼女を愛しているんだ。

タラ条件文を使えば純粋な仮定だが、（50）のようにナラを用いれば、人がそのように言っていて、自分はその事実を断定できないが、人の言うことを信じ、断定することができると仮定

[14] 図では提示された命題「3時に出発した」を他者の言説の引用と解釈しているので、MとRを同時期にとり、Mの直下にRを描いているが、「ジョニーが来たなら、伝えてよ」のような場合、純粋に仮定的事態であり、MがRより右側（未来）の位置にくることもある。

[15] EVENTの移動は「談話構成原理」によって支配され、日本語の場合、（i）同じ位置にとどまる。（ii）V-POINTの位置に移動する。（iii）新しいスペースに移動する。の3つの場合が可能である。

するなら、という認識論的解釈ができるのである。

３.２．日本語の仮定文と過去性や完了性の関係

このように日仏語の非現実仮定を比較するなら、ナラ条件文ではなく、タラ、レバ条件文で比較しなくてはならない。（5b）（6b）が事実未定になるのは、ナラ条件文が認識論的条件文の解釈をもつことと関係があるのであって、ル形やタ形と直接の関係はないと思われる。（６）の前件をタラ条件文に変えてみると

（51）a. すぐ病院に運んだら、助かった。

b. すぐ病院に運んでいたら、助かった。

c. すぐ病院に運んだら、助かっていた。

d. すぐ病院に運んでいたら、助かっていた。

となり、いずれからも事実未定という解釈は前面に出てこない。（51）のいずれも反実の解釈が可能であり、タ形だから現実、テイタ形だから反実というように区別されるわけではない。確かに、現実解釈ができるのは（51a）と、特殊な文脈があれば（51c）だけであるので、タ形とテイタ形の間には現実解釈の可能性に関して差異がある。また（51a）はほぼどちらの解釈も等しく可能であるが、（51c）は仮定解釈の方がはるかに自然だろう。このことから前件のみならず、後件の形式も仮定解釈か否かに関与しているように思われる。また前件を「運べば」というレバ条件文の形にすると、すべて反実仮定解釈になるので、レバ条件文をル形の形式、タラ条件文をタ形の形式としてその時間的対立がモーダルな差に対応していると言うこともできない。タラ条件文に関して、「PしていたらQしていた」というように前件と後件がともにテイタ形で現れる形が、最も反実の解釈が有利になる形式であると言えるかもしれないが、動作性の動詞の場合は、現実解釈も可能である。

（52）テレビを見ていたら、知り合いが出ていた。

（52）は既定条件解釈が普通だろう。前件にテイタ形が来ることによって仮定解釈が優勢になるのは、完了性の動詞のみである。「P（してい）たらQ」という条件文は既定条件の場合、「Pし（てい）た時Q」という意味構造を背景にもつ。完了動詞の結果継続はこのような継起になりにくいので、仮定解釈の方に傾く、というのがテイル形が仮定というモーダルな意味に変質しているように見える主たる原因であろう。紙幅の関係で、日本語の文末形式と仮定の意味との関係について、詳しいことは別稿にゆずるが、ここでは日本語ではタ形のみがもつPASTは（24a）の意味でしか働かず、（24b）の意味が実現することはなさそうである、ということを示唆してとりあえずの結論としておきたい[16]。

[16] 井元（2012c）で、テイル形は動詞のイベント内容を変化させるのであってスペース構造とは無関係であることを示した。

４．結論

PASTのテンス素性は、時に非現実の事態を述べるための仮定領域にスペースを構築する働きを持つことがあり、これがバックシフトの原因になる。フランス語では半過去と大過去の一部にのみこの意味の発現が見られ、時に反実の含意を生む。これに対し、日本語ではタ形がPASTの素性を含んでいるが、仮定領域を設定する機能の発現はない。

参考文献

Cutrer, M.（1994）, *Time and tense in narrative and in everyday language.* Ph.D.thesis, University of California San Diego.

井元秀剛（2010）『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房.

井元秀剛（2012c）「テイル形の意味構造」『言語文化共同研究プロジェクト2011 時空と認知の言語学I』, 1 -10.

井元秀剛（2012d）「反実仮想条件文に見られる半過去に関する一考察」『川口順二教授退任記念論集』web.keio, 45-53.

井元秀剛（2013）「ト条件文のスペース構成と意味」『言語文化共同研究プロジェクト2012 時空と認知の言語学II』 1 -10.

工藤真由美（1997）「半事実性の表現をめぐって」『横浜国立大学人文紀要第II類（語学･文学）』44, 51-65.

Le Goffic, P. & F. Lab（2001）, “Le présent ‘pro futuro’” , *Cahier Chronos* 7 *Le présent en français*, Rodopi, 77-98.

曽我祐典（2015）「現在・未来の反実仮定と半過去・大過去の使い分け」『フランス語学の最前線 3』ひつじ書房, 183-215.

尚本研究はJSPS科研費26370448の助成を受けて行われたものである。